



Heart to Heart



いじめに正面から向き合う「考え、語り合う道徳」

本校の道徳教育部は、「特別の教科 道徳」の充実が、いじめの防止に向けてたいへん重要であると考えています。いじめられた子どもは、学校に通えなくなったり、心身に重大な支障を生じたり、尊い命が絶たれるという痛ましい事案も発生しています。いじめた子どもも、法律又は社会のルールに基づき責任を負わなければならない場合があるとともに、その心に大きな傷を残します。「いじめのつもりはなかった」、「みんなもしていたから」ではすみません。また、いじめられている子どもを見ていただけの周囲の子ども達も、後悔にさいなまれます。

子ども達を、いじめの加害者にも、被害者にも、傍観者にもしないために、「いじめは許されない」ことを道徳教育の中でしっかりと学べるようにする必要があります。道徳の特別の教科化の大きなきっかけは、いじめに関する痛ましい事案でした。1986年（昭和61年）、中学2年生の男の子は、「俺が死んだからといって他の奴が犠牲になったら意味ないじゃないか」という言葉を残し、自殺い追い込まれました。日本で初めていじめ自殺として社会的に注目された事件でした。あれから、30年以上が経ちましたが、全国の小中高校などで平成30年度に認知されたいじめが前年度から約13万件増加し、54万3933件と過去最多を更新したことが、文部科学省が実施した問題行動・不登校調査で分かりました。

これまでも道徳教育はいじめの防止に関して大きな役割を負っていました。しかし、これまでの道徳教育は、読み物の登場人物の気持ちを読み取ることで終わってしまっていたり、「いじめは許されない」ということを児童生徒に言わせたり書かせたりするだけの授業になりがちと言われてきました。そこで、本校では、現実のいじめの問題に対応できる資質・能力を育むために、「あなたならどうするか」を真正面から問い、自分自身のこととして、多面的・多角的に考え、議論していく「考え、語り合う道徳」を実践しています。道徳の授業の中で、いじめに関する読み物教材を範読した後、生徒が考え、仲間と語り合う授業を積極的に行っています。いじめやいじめにつながる具体的な問題場面について、例えば、

- ・どのようなことが、いじめになるのか。
- ・なぜ、いじめが起きるのか。
- ・なぜ、いじめはしてはいけないのか。
- ・なぜ、いじめはいけないと分かっているのに、止められなかったりするのか。
- ・どうやって、いじめを防ぐこと、解決することができるのか。

といったことについて、自分のこととして考え、仲間と語り合うことを通して学ぶことが大切であると考えています。こうした学びは、いじめという問題だけではなく、道徳教育の目標である「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことそのものにつながります。

裏面に、本校1年生の「道徳の時間」においての語り合いの中で出された意見を掲載しています。

自分のこととして考え、仲間と語り合う道徳の実践

1年生「道徳の時間」（令和元年10月17日実施）の生徒たちの発言より

・どのようなことが、いじめになるのか。

相手の嫌がることを言ったり、やったりしておもしろがること。ささいな冗談と思いついでからかうこと。人をバカにして陰口を言ったり、あざ笑うこと。集団で、一人を責めたり、バカにしたりすること。相手が嫌がっているのに、しつこく迷惑行為をすること。何度もその人が嫌がることを言うこと。いじめを目撃しているのを見て見ぬふりをすること。

・なぜ、いじめが起きるのか。

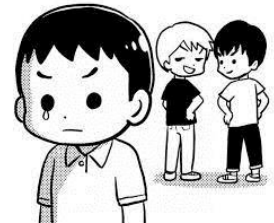
学級の中に上下関係（スクールカースト）があるから。人間関係に優劣があるから。

一人が悪口を言うと、それに同調してしまうから。

自分勝手な考え方だから。

相手の心の痛みが感じられないから。

人をからかったり、悪口を言うことを許している雰囲気だから。



・なぜ、いじめはしてはいけないのか。

自分もいじめられたくないから、人をいじめてはならない。

相手を傷つければ傷つけるほど、知らず知らず自分をも傷つけていることになるから。

相手に嫌な思いや、悲しい思いをさせてもよい人なんていないから。誰もが幸せになる権利があるから。

相手の心を傷付けることになるし、相手を自殺させてしまうこともあるから、絶対にしてはいけない。

理由なんてない。人を傷つけることを人間がするべきではない。

・なぜ、いじめはいけないと分かっているけど、止められなかったりするのか。

自分も嫌われるかもしれないから。勇気がないから。自分を守ってしまうから。

・どうやって、いじめを防ぐこと、解決することができるのか。

防ぐことは難しいけれど、解決はできる。先生や親にいじめられていることやいじめている人について言う。

みんなで、人が嫌がることを言いにくい雰囲気、許さない雰囲気にする。

いじめがあれば、見て見ぬふりをせずに、止める。止める勇気がないなら、先生に言う。

北城陽中学校の道徳の時間

1年生「ヨシト」

アツシと幼なじみのヨシトは何事もマイペースで、周りに合わせることやその場の雰囲気を察して振る舞うことが苦手。そのせいか、次第に浮いた存在となり、学級でも一人である。そして、みんながヨシトのことをくすくす笑う。アツシはヨシトと変わらず接していたが、徐々にみんなの視線が気になるようになり、ついヨシトを避けてしまう。

いじめられているヨシトに寄り添うことができなかったアツシの気持ちがよくわかる。ヨシトと仲良くしたい。でも、その他の人とも仲良くしたい。いじめを受けている人と仲良くすると他の人から嫌われるような気がして、いじめられている人の力になれない。これが一番だめなのかと思う。（1年生）

2年生「キングと呼ばれる理由」

ワールドカップ出場を目指し、夢が破れてもなおサッカーを続ける三浦知良選手の生き方について考えることを通して、高い目標に挑戦していくことの素晴らしさに気づき、困難や失敗に直面しても、希望や勇気を失うことなく、努力を続ける大切さを学ぶ。

三浦知良選手が「キング」と呼ばれる理由は、何度挫折してもあきらめない心の強さがあるからだと思います。私は小5の時にバスケットを始めました。しかし、レギュラーをとることはできず、嫌になりました。しかし、続けていけば良いことがあると思い、中学でもバスケットを続けています。継続することと、努力することに意味があると思いました。（2年生）

3年生「月明かりで見送った夜汽車」

文化祭準備のため先生たちが夜遅くまで忙しく飾り付けをしている小学校が舞台。準備の途中で、国体に参加するためI先生が申し訳なさそうに出かける。I先生の乗る夜汽車が学校の脇にさしかかろうという時間「I先生に安心して出かけてもらうために電気を消しました」という校内放送が流れ、真っ暗な校内から全職員が月明かりの中をゆく夜汽車を見送る。

思いやりとか、気をつかうって難しいなあと改めて思いました。うまく気遣いができる人はきっと相手のことをしっかりと見ていて、自分が何をすべきかをよく考えているんだなと思いました。（3年生）